6. 新たな決意

宮田村宮田中学校三年　K・K

ああ、又一斉テストか。こんどこそはMさんをまかさなくては――そう決心

して計画を立てるのですが、いざ実行になると全然だめです。私はあすなろのとうりだという事がわかり、自分ながらも情無くなってしまいました。

今日も無事に一日がおわり家に帰れる。私の家は少し遠いので、一人で歌を口ずさみながら、又、とんでもない様な事を空想しては帰るのです。

「ただいま。」

今日も返事がないのか。それもそのはず。家にはおばあさんがいるだけです。なんだかもの寂しい様な気がするのですが、お父さん達は、私達のために一生懸命働いてくれているのですから、そんなわがままもいえません。たまに母が家にいる様な時は、こんなに大きななりをしていて、とってもうれしいのです。

夕飯のしたくは、私がするのですが、学校から帰るのが遅くなった時などはたいへんです。又夕飯の時も家中そろってたべるという事は、ほとんどありません。父が残業をしている時、又父は早く帰って来たと思うと姉のならいもの こんなに静かな夕飯でなくて、毎ばん一家だんらんで楽しみたい、こんな気持は私だけでなく家中皆がもっていると思うのです。

思い出せば丁度二年前、考えただけでも恐ろしくなる集中豪雨さえなかったら、私達はこんな生活にはならなかったのにと思い、あの水害がにくらしくてなりません。

学校でさみしい様な歌を歌う時は寮にいるころを思い出し、なんだかとっても悲しくなってしまうのです。

そういえばこんな事もありました。私達一年生が家に帰りたいのか何ともわ

けなしにやたら悲しくなってしまい、皆でないてしまったのです。その時先生は、散歩に行こうと私達をつれ出し、こんな話をしてくれたのです。
「両親をなくした人だっているんだ。おまえ達はまだまだしあわせの方だよ。」
私達はだんだんと元気をとりもどして寮に帰ったのですが、寮の前の石がきの所を見ると二三年生がすわって「しあわせの歌」を歌っていました。それを見た私達は、又なきだしてしまいました。

　今考えてみれば、二三年の人達の方が私達よりも倍も倍もかなしかったのです。それをじっとがまんしていたのですから、ないてしまった私達がなんだかはずかしい様な気がしてなりません。

　おぼんに家に帰った時は、なんだか自分がお客様の様でへんな気持でした。家の人から、
「よく帰ってきたな。寮はおもしろいか。」
いろいろ聞かれるので又悲しくなってしまい、家の人にはなき顔を見せない様にといっしょうけんめいで、部屋の中に飛びこんでふとんをかぶってないたこと。

　あの水害さえなかったら、私はまだあの静かな山の中に住んでいたのにと思い、なんだか残念でなりません。

　しかしそのはんめん、よい点もいっぱいあります。第一、四徳（中川村）にいたら高校にも行けなかったし、又競争力というものが何もつかなかったように思うのです。

私は三人の姉妹を持っているのですが、あの不便だった山の中に住んでいたため一人も高校に行っていないのです。さいわいに、私は、便利な所に来たので高校にも行かせてもらう事になりました。まだうかるかわからないのですが、どうしても勉強して三人の姉妹のためにも、又家や母達のためにもうからなくてはと思っています。

今の私には、どんな事があってもはずかしい事のない様に、入試のための勉強に全力を上げて頑張るつもりです。

（三十八年）